

令和7年度 学校関係者評価報告書(第1次) No.1

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属小学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
教育課程・ 学習指導等	1. 児童に基礎的・基本的な 学力を身につけさせる。	各学校園の特色や伝統を 継続する。	教科担任制による専門性を 活かした指導	・全国学力・学習状況調査における 国語・算数の学校平均正答率:85% 以上 ・同質問紙調査の関連項目でのプ ラスの回答率:80%以上 ・教科担任および学級担任にお ける学習成果の見取り	・平均正答率:国語87(67.0), 算数90 (58.2)※括弧内の数字は全国平均 ・国語/算数の授業で学習したことは将 来, 社会に出た時に役立つと思う(「そう 思う」+「どちらかと言えばそう思う」) ・国語:93.3%, 算数:93.3% ・調査結果をもとに, 学級担任および教科 担任で分析を行った。	A	正直これまで「高度な教育」が行われて いると思っていなかった。公開研究会や 授業参観等を拝見すると, 「高度な教 育」であると再認識した。高い正答率で 維持している。達成状況, 参観日などの 授業風景を鑑みると適切に行われている と思う。	A	・全国学力・学習状況調査の結果を全 国平均と比較するのみでなく, 本校で実 施する定着テスト(年3回)を成果指標 として判断基準を設けるなど, 児童の学 力をより適格に把握する。 ・コンテンツとともに, コンテンシー ベースの授業展開を促進し, 一人一人 の児童の学習状況にあった指導と評価 を行う。
	2. 自治的活動により, 他者 を思いやる心を育てる。	各学校園の特色や伝統を 継続する。	委員会活動や異学年交流 活動の活性化	・全国学力・学習状況調査の質問 紙調査の関連項目でのプラスの回 答率:80%以上 ・委員会活動や異学年交流活動の 活動計画および実施状況と担当教 員による見取り	・人の役に立つ人間になりたいと思うか (「そう思う」+「どちらかと言えばそう思 う」), 100% ・前期委員会活動は予定通り終了 ・異学年交流活動を取り入れて平和集会 を実施 ・年度末に担当教員による振り返りを行う	A	サークル活動は, 本人が興味をもつこと だから, 自律・自立への第一歩を感じ た。すばらしい結果である。他学年と好 きなものを通じて仲良くなるのはとても良 い活動だと思う。早いうちに熱中できるも のが見つかることが自身の可能性を伸 ばせる。	A	・好きなものを通じて異学年と交流する サークル活動をさらに展開し, 児童の自 主性を育む。 ・清掃活動やボランティア活動の充実によ って, 勤労の尊さや社会奉仕の精神 を養う。
	3. ESDの推進	教育課題への対応(ESDの 推進)	教科の学習や総合的な学習 の時間, 校外学習等にお ける取り組み	学習の内容及び編成されたカリ キュラム	・平和教育のカリキュラムが整備されると ともに, 校外学習(被ばく電車運行プロ ジェクトへの参加, 山の学習や研修旅行) においても学習が深められている。 ・制服や体操服の変更についての準備が 進められている。	・平和教育とさらに交流してほしい。研究会 ではどの先生もとても生き生きとしてお り, この学校で学べる子供は幸せだと感 じた。自分が子供のころにこのような授 業を受けていたら, もっと勉強が好きに なっていたと思う。	A	制服が男女で似たデザインになったこと により, 附属色が強くなり洗練された感じ がある。制服の選択肢が増えるのはよい と思う。平和教育は戦争の愚かさを理解 させたい。人権への配慮はどのように指 導しているのか, 制服, 体操服の変更に 対する保護者の反応は肯定的だった。	A
教育研究等	4. 大学や他附属との連携を 通して, 各教科の新しい指 導方法を開発するとともに, 新たな研究テーマを立ち上 げる。	・大学と附属の共同研究の 推進 ・附属学校間の交流の推進	・学部附属および他附属と の共同による授業研究の実 施 ・大学教員の助言をふま えた研究テーマの立ち上げ	・大学および他附属教員参加 の研究授業の実施 ・設定された研究テーマ	・英語科, 算数科, 体育科で校内研究 授業を実施した。2月の全国協議会では, 大学教員参加の授業研究が全教科で行わ れる。 ・複数の大学教員が研究授業に参加する など, 研究テーマの立ち上げに向けて大 学との緊密な連携が図られている。	A	他附属とさらに交流してほしい。研究会 ではどの先生もとても生き生きとしてお り, この学校で学べる子供は幸せだと感 じた。自分が子供のころにこのような授 業を受けていたら, もっと勉強が好きに なっていたと思う。	A	・翠地区としての研究力を強化するた めに, 互いの研究部が協議する場を設け るなど, 附属中高との連携を図る。 ・大学教員と連携しながら学校の研究を 推進する。
	5. 教育研究の成果を複数 の方法で公開する。	教育研究の成果を発信す る。	・季刊誌『学校教育』の発行 ・研究紀要の刊行, リポ ジトリへの登録 ・研究大会の開催	・季刊誌の発行:年4回 ・研究紀要の刊行:年1回, リポ ジトリへの登録 ・研究大会の開催:年1回 参加 者数:500名以上	・『学校教育』春, 夏号を刊行済。研究紀 要の刊行と機関リポジトリへの登録済 ・研究大会を2月6日, 7日に開催予定。広 島県・広島市のすべての学校に2月の全 国協議会の案内と招待状(広島市)を発 送予定。 ・WALS(World Association of Lesson Study)での公開授業(11月12日, 広島国 際会議場, 参加者数約1,000名)	A	「学校教育」誌は厚みを増して読み応え 充分, 季刊誌発行はよいアイデアだ った。WALSはすばらしい。大勢の中で落 ち着いて授業を受けることができるのは 本当にすばらしい。研究大会は教員の 負担が大きいが, 自信をもって紹介でき る内容だと思う。	A	・公開研究大会案内の範囲や時期, 方 法について引き続き検討するとともに, 広島市立小中学校の校長に加えて, 教員 1名を招待することを継続する。 ・学校教育誌のウェブ上で公開につ いて検討する。
	6. 他校や他研究機関から の授業観察を受け入れる。	研究開発等の成果を教育 モデルとして示すとともに, 実践的な実習・研修の場を 提供する。	授業観察等の受け入れ	授業観察, 学校訪問等の受け 入れ件数と訪問者の感想	・WALS参加者(30名程度)による授業見 学(造形)が11月13日に予定されている。 ・香川県(7名)および長崎県からの視察 が10月23日と10月28日に予定されて いる。	・WALS参加者(30名程度)による授業見 学(造形)が11月13日に予定されている。 ・香川県(7名)および長崎県からの視察 が10月23日と10月28日に予定されて いる。	A	他校との交流は引き続き実施してほ しい。大学との連携が強化されている点 が大きい成果である。	A
社会 連携・ 社会貢 献活動等	7. 教科担任制を活かした学部 の教育実習および大学院の アクションリサーチの受け入れ を実施する。	学部・研究科等と連携し, 実践 的な実習・研修の場を提供す る。	・教科担任と学級担任による教育 実習およびアクションリサ ーチの指導 ・アンケートによる効果の検証	・教育実習生アンケートでの「とても 満足」の回答者割合:90%以上 ・アクションリサーチの大学院生に よる振り返り	教育実習終了後にアンケートを実施予 定。アクションリサーチを行った大学院生 に聞き取りを実施予定。	A	社会に貢献している。実習生の中で問題行動のある ものはいなかったのか, 学生の満足度が高い。時間 の使い方も実習生に教えるべきである。限られた時間 の中で, かにパフォーマンスを行っていくかを実習の 時から学んでいる。	A	・児童にとっても, 教育実習の機会がキャリア教育の 一助となるよう意図的・計画的に取り組む。 ・実習生の教職に対する肯定的な理解を促進し, 将来 の職業として自覚できるよう一層きめ細やかな指導 を行う。
	8. 本校教員の講師派遣を 促進する。	先導的な教育モデルを開発し, その成果を全国あるいは 地域に展開する。	県内外校内研や研修会へ の教員の派遣	・講師派遣依頼の件数 ・研究会への教員の参加者数	・国語科3件, 算数科23件で講師派遣依 頼の件数は計26件である(8月末現在)。 ・市の研究会に全員参加。本校も研究会 (算数)の会場として実施。	A	指導助言の教科が増えてよい。理科も 力を入れてほしい。依頼件数が増えて おり貢献している。指導助言が国語科ま で広がっていった点は, 本校の教育開 発校としての役割がより評価できる。	A	・講師派遣依頼の多い算数科の実態か ら, そのノウハウを学ぶことによって, 他 教科でも派遣講師依頼の増加を図る。

注) 太枠内は, 学校関係者評価委員会が記入する。

令和7年度 学校関係者評価報告書(第1次) No.2

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属小学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
学校経営・ 安全管理等	9. 特別な支援を必要とする 児童やいじめ防止への対応 を積極的に行う。	生徒指導を改善し, いじめ 防止を徹底する。	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育委員の設置 補助員による支援 いじめ防止委員会およびケース会議での情報共有と対応検討 教員間での情報共有体制の強化 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育委員のもとでの特別支援教育補助員の年間雇用時数:700時間以上 いじめ防止委員会およびケース会議の開催(毎月1回) 情報共有体制の構築 対応の成果の見取り 	<ul style="list-style-type: none"> 4名の特別支援教育補助員を時間雇用しており, 学習支援を行っている。 いじめ防止委員会・教育相談委員会を定期的に月1回開催している。 「いじめ認知シート」を使用して, 記録の一元化および教員間での情報の共有性を高めている。 「このごろのわたし」アンケートの実施を2回から3回に増やすとともに, 「学校適応感尺度(ASSESS)」の実施 	A	いじめはあるという前提で, あったことを隠さずオープンに対処していく仕組みが望ましいと思う。子供のトラブルを軽視せず, しっかりと向き合っている。聞き取りも行っているし, 情報共有も行われている。問題が深くなる前に, 児童・保護者とコミュニケーションをとっていける環境を強化してほしい。	A	<ul style="list-style-type: none"> いじめの認知に係る教職員の記録簿の改善を図るとともに, 校内連絡系統の周知・徹底によって, いじめの未然防止, 早期発見・早期対応に生かす。 不登校児童に対する校内対応を明確にするとともに, 関係機関との連携・協力体制を構築する。
	10. 教職員の労働時間を改善するとともに労働の質を高める。	「働き方改革」をふまえた学 校経営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 年休の確実な取得や超過勤務時間短縮のための意識づけを定期的に行う。 個人評価シートに「働きがい」についての記述を行い, 意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的年休取得制度による年休取得者の割合:100% 残務時間:前年度比減 「働きがい」に対する教員の意識 	<ul style="list-style-type: none"> 4月から8月まで一人当たり平均7.5日(前年度は8.3日)の年休を取得している。 4月から7月までの残務時間平均は28.5時間(前年度は27.6時間)となっている。 個人評価シートに「働きがい」についての項目を設け, 意識づけを行っている。 	C	先生方には感謝です。創立120周年という節目もあったため, どうしても残務時間が増えてしまったのかなと思った。体調だけは気を付けてほしい。様々な取組を行っているので, 個々の負担が増えるのは仕方ない面もある。残務時間の増加理由をはっきりさせ, 今後の具体的アクションに結び付けてほしい。教職員のやりがい・成果とのバランスをとりながら慎重に進めていただきたい。	B	<ul style="list-style-type: none"> 業務内容に伴う勤務時間の実際に合致した精度の高い勤務シフト表を作成する。 校内における会議等のひとつひとつに終了時刻を明示することによって, 働き方改革に対する意識の向上と業務の効率化を図る。

注) 太枠内は, 学校関係者評価委員会が記入する。